動詞のテ形と連用形の使用差に関する計量的調査研究

― 新聞・論述文・小説における語彙調査の結果から ―

Quantitative Study on Relative Usage of *te*-forms and Infinitive Forms of Verbs: Based on the Results of Vocabulary Survey of Newspapers, Theses and Novels

林　　雅子
HAYASHI Masako

キーワード

［動詞テ形］*te*-forms of verbs・［動詞連用形］infinitive forms (*ren'yoo* forms) of verbs
［文法的類義表現］grammatically synonymous expressions・［計量的研究］quantitative study
［語彙調査］vocabulary survey

1．目的

動詞テ形と動詞連用形の使用差に関する従来の研究では、それらは主に意味・機能的差異であり、文体的差異はごく限られた一面のみであるとする説（新川（1989）等）がある一方で、両形の間の差異は文体的差異であり、機能的差異はほとんどないとする説（渡辺（1971）等）があり、統一的見解は得られていなかった。しかし、動詞に由来する副詞的成分に関していえば、現代語において動詞テ形由来の副詞は非常に多く見られる一方で、連用形由来の副詞は少ないという差異がある。

その差異の要因や、先行研究における見解の対立を明らかにするために、林（2004）では、テ形・連用形の実態調査を行ない、その使用差に関して計量的調査を行なった。その結果、主節・後続節に対する意味・機能的差異と文体的差異が相互に関与し合ってテ形・連用形の選択に影響を与えていることが明らかになったが、それと同時に、文章タイプ（文章の種類）の差異も両形の使用差に関与することが分かった。

そのため、文章タイプの差異を越えてテ形或いは連用形に偏るものがあるのか否か、またあるとしたらどのようなものかを調べる必要がある。よって、新聞・論述文・小説という異なる文章タイプにおいて調査を行ない、テ形と連用形のどちらかに偏って出現するものにはどのようなものがあるかを考察することを本稿の目的とする。

2．先行研究と本研究の位置付け

林（2004）では、動詞テ形・連用形の語彙的意味が両形の選択に関与する可能性を配慮し、両形の使用差に関わる要因を意味・機能的差異、文章・文体的差異に絞るために、１つの動詞（「なる」）を取り上げて詳細に分析し、上述のような結論を得た。今後は、全動詞に対象を広げて意味・機能的観点からの調査を行う予定であるが、その前段階として、本稿では、両形の語彙的意味の違いがその使用率にどのように関与しているかを明らかにすることを試みる。

また、林（2004）では「新聞（地の文）」と「小説（地の文）」の間で、林（2002）では「新聞（地の文）」と「論述文（地の文）」の間で、両形の比率に違いが見られたので、本稿では、「新聞」「論述文」「小説」の地の文を対象にして調査する。

3．資料

「２.」で述べた理由から、資料として「新聞」「論述文」「小説」の地の文を選んだ。

1）「新聞」

『CD―毎日新聞'98年版』朝刊社会面全国版新聞記事から１日15文を無作為抽出したもの

2）「論述文」

以下の各30作品からテ形か連用形のどちらかを含む文を冒頭から100文抜き出したもの

中根千枝『タテ社会の人間関係』、会田雄次『日本人の意識構造』、中根千枝『適応の条件』、中根千枝『タテ社会の力学』、吉田寿三郎『高齢化社会』、井上忠司『まなざしの人間関係』、黒井千次『働くということ』、飯田経夫『「ゆとり」とは何か』、加藤秀俊『パチンコと日本人』、中川剛『憲法を読む』、山田雄一『稟議と根回し』、中川剛『日本人の法感覚』、森清『選び取る「停年」』、今津晃『二十世紀の世界』、織田武雄『地図の歴史（日本）』、河野友美『たべものと日本人』、高尾一彦『近世の日本』、飛鳥井雅道『近代の潮流』、吉野裕子『日本人の死生観』、山折哲雄『神と仏』、下川浩一『日本の企業発展史』、吉岡郁夫『人体の不思議』、井上昌次郎『睡眠の不思議』、都筑卓司『時間の不思議』、金田一春彦『日本人の言語表現』、合山究『故事成語』（以上、（講談社・現代新書））、中村希明『犯罪の心理学』、中村希明『酒飲みの心理学』、中原英臣・佐川峻『進化論が変わる』、米山正信『化学とんち問答』（以上、（講談社・ブルーバックス））（以上、CASTEL/Jのデータを使用した）

3）「小説」

以下の各30作品からテ形か連用形のどちらかを含む文を冒頭から100文抜き出したもの

小松左京『日本アパッチ族』（角川書店）、浅田次郎『真夜中の喝采』、かんべむさし『人事部長極秘ファイル』、小川竜生『崩壊』、中村光至『拉致』、辻真先『能登はやさしや鬼までも』、田中光二『処刑の火山島』、檜山良昭『大逆転！幻の超重爆撃機「富嶽」８』、荻史朗『黒殺』、清水義範『茶色い部屋の謎』、喜

多嶋隆『サンセット・ビーチで逢おう』、浅利佳一郎『桜前線殺人事件』（以上、光文社）、和久峻三『牡丹屋敷の殺人』、斎藤栄『みちのく三内丸山殺人旅行』（以上、徳間書店）、伴野朗『ラムタラは死の香り』（こーりん社）、村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』、椎名誠『新橋烏森口青春篇』、沢木耕太郎『一瞬の夏』、赤川次郎『女社長に乾杯！』、曾野綾子『太郎物語—高校編・大学編—』、渡辺淳一『花埋み』、井上ひさし『ブンとフン』、新田次郎『孤高の人』、石川達三『青春の蹉跌』、三浦綾子『塩狩峠』、安部公房『砂の女』、三浦哲郎『忍ぶ川』、井上靖『あすなろ物語』、松本清張『点と線』、大岡昇平『野火』（以上、新潮社）

4）会話文・地の文の基準

会話文と認定したものは、原則として「鍵括弧に括られていて、かつ、発話されていることが明らかなもの」とした。ただし、以下に記す場合は、上記以外の扱いをした。

・鍵括弧で括られてはいないが発話されていることが何らかの形で明示されているため会話文として扱ったもの

（a）○○の話／声等（b）インタビューの応答（c）その他の記号で会話文であることを明示しているもの

・鍵括弧はあるが発話されてはいないため、地の文として扱ったもの

（a）日記・書簡・投書・メモ等（b）書き言葉の文章の引用等（c）思考内容等

4．調査対象

まず、「3.」で挙げた資料からテ形と連用形を採取し、テ形と連用形をとる動詞のリストを作り、その使用度数と比率を出した。動詞リストの作成に当たって、調査単位の句切り方は国立国語研究所（1962）に、同語異語判別の基準は国立国語研究所（1964）に従い、必要な場合は適宜補った。また、以下のものは調査対象から外した。

（a）テ形と連用形の否定形のもの

（b）地の文における文末が「デス・マス体」のもの

（c）テ形・連用形以下が省略されているもの

（d）テ形・連用形からの転成副詞・転成接続詞（国立国語研究所（1964）で副詞・接続詞とされている以下のもの）

あえて・あまり・いたって・おしなべて・および・がいして・かえって・かねて・かろうじて・きわめて・けっして・さだめて・したがって・すべて・そうじて・たいして・たとえ・だんじて・つまり・なべて・はじめ・はじめて・はたして・ひいて・まして

（e）テ形・連用形が異なる用法を持つもの

・テ形のみの用法

（1）補助動詞などの前項となる場合

（2）「—から」「—以来」などの形を取る場合

（3）助詞を下接する場合（係助詞「は」「も」、間投助詞・終助詞「ね」「よ」等）

・連用形のみの用法

（1）複合語の前項となる場合
（2）「—ながら」の形を取る場合
（3）「—に」の形で移動の目的を表わす場合

5．考察対象語彙の選定

各文章タイプによってテ形・連用形の延べ語数と比率が異なるので、それらを比較して「テ形に偏って出現した」「連用形に偏って出現した」とするために、次のような方法をとった。各文章タイプのテ形・連用形の全体の比率を基準値と考え、個々の動詞における両形の比率がその基準値の2倍以上になるものを、テ形或いは連用形に偏って出現したものとみなした。

表1　各文章タイプの度数と比率

文章タイプ	テ形		連用形		延べ語数	異なり語数
	度数	(比率)	度数	(比率)		
新聞	1063	(0.42)	1451	(0.58)	2514	434
論述文	2818	(0.68)	1351	(0.32)	4169	631
小説	2571	(0.70)	1095	(0.30)	3666	774
合計	6452	(0.62)	3897	(0.38)	10349	1247

即ち、ある文章タイプにおいて、ある動詞が「テ形に偏って出現した」かどうか調べるために、ある文章タイプ全体の連用形の度数（Y）に対して、その文章タイプ全体のテ形の度数（X）が何倍使われているかの値（X／Y）を、その文章タイプ全体の基準値（基準比率）とし、ある動詞iの連用形の度数（b_i）に対するテ形の度数（a_i）の割合（$a_i／b_i$）が、基準値（X／Y）の2倍以上であれば、その動詞はその文章タイプにおいて「テ形に偏って出現した」ものとみなす。

$$(a_i／b_i)／(X／Y) \geqq 2$$　**「テ形に偏って出現したもの」**

逆に、ある動詞が「連用形に偏って出現した」かどうか調べるために、ある文章タイプ全体のテ形の度数（X）に対する連用形の度数（Y）の値（Y／X）を、その文章タイプ全体の基準値とし、ある動詞iのテ形の度数（a_i）に対する連用形の度数（b_i）の割合（$b_i／a_i$）が、基準値（Y／X）の2倍以上であれば、その動詞はその文章タイプにおいて「連用形に偏って出現した」ものとみなす。

$$(b_i／a_i)／(Y／X) \geqq 2$$　**「連用形に偏って出現したもの」**

この方法ですべての動詞に対して各文章タイプ別に計算した結果、「全文章タイプでテ形に偏って出現したもの」は25語で、「全文章タイプで連用形に偏って出現したもの」は29語となった。但し、両形の合計度数が1のものは、比率の上では100%：0%になるが、偶然の可能性もあるので、考察対象語彙からは除いた。その結果、「全文章タイプでテ形に偏って出現したもの」は表2に示した11語、「全文章タイプで連用形に偏って出現したもの」は表3に示した9語となり、これを考察対象語彙とした。

6．結果

6.1　全文章タイプでテ形に偏って出現したもの【表２】

〔１〕「**いる（居）、くる③（来）、へる①（経）、みる**」は、連用形の時に一拍になるものであり、「一拍語形の不安定性」によりテ形に偏って出現することが宮島（1982）で指摘されている。宮島（1982）は現代雑誌を資料にした調査結果に基づいているが、本稿で資料とした新聞・論述文・小説でも同様の結果になった。

〔２〕「**とる②**」「**つく③**」「**よる③**」はそれぞれ「～にとって」「～について」「～によって」という複合格助詞として働く機能語的表現である。これらは，複合格助詞，後置詞などと呼ばれ，その定義や範囲認定が各研究者の間で揺れているので，本稿では，便宜的に「機能語的表現」とした。

「**通じる**」も１例を除き、すべて「～を通じて」の形で用いられており、以下の例のように、終止用法をもたず機能語的に働いているものが多い。

> アラビア語でマグリブ、すなわち「太陽の沈む所」として知られる、エジプト以西の北アフリカは、十九世紀を通じて欧州の支配下にはいった地域である。（『二十世紀の世界』）

機能語的表現はテ形に偏るものが多いが、すべての機能語的表現がテ形に偏るわけではなく、文章タイプによっては連用形に偏るものもある。例えば、「～に対し（て）」は、論述文（テ形：連用形＝92：16）と小説（同＝23：０）ではテ形に偏って出現したが、新聞（テ形：連用形＝11：55）では連用形に偏って出現した。

表2　全文章タイプでテ形に偏って出現したもの

	文章タイプ	テ形 度数(比率)	連用形 度数(比率)	合計度数
いる	新聞	10(1.00)	0(0.00)	10
	論述	52(1.00)	0(0.00)	52
	小説	79(1.00)	0(0.00)	79
くる③	新聞	4(1.00)	0(0.00)	4
	論述	14(1.00)	0(0.00)	14
	小説	52(1.00)	0(0.00)	52
へる①	新聞	14(1.00)	0(0.00)	14
	論述	8(1.00)	0(0.00)	8
	小説	4(1.00)	0(0.00)	4
みる	新聞	59(1.00)	0(0.00)	59
	論述	29(0.85)	5(0.15)	34
	小説	47(1.00)	0(0.00)	47
とる②	新聞	2(1.00)	0(0.00)	2
	論述	76(1.00)	0(0.00)	76
	小説	26(1.00)	0(0.00)	26
つく③	新聞	102(0.98)	2(0.02)	104
	論述	70(0.97)	2(0.03)	72
	小説	23(0.96)	1(0.04)	24
よる③	新聞	14(0.74)	5(0.26)	19
	論述	342(0.94)	21(0.06)	363
	小説	60(09.2)	5(0.08)	65
通じる	新聞	9(0.69)	4(0.31)	13
	論述	23(0.88)	3(0.12)	26
	小説	2(1.00)	0(0.00)	2
ちがう	新聞	3(1.00)	0(0.00)	3
	論述	11(0.92)	1(0.08)	12
	小説	3(1.00)	0(0.00)	3
あらためる	新聞	6(1.00)	0(0.00)	6
	論述	20(1.00)	0(0.00)	20
	小説	15(1.00)	0(0.00)	15
だまる	新聞	2(0.67)	1(0.33)	3
	論述	2(1.00)	0(0.00)	2
	小説	23(0.96)	1(0.04)	24

表3　全文章タイプで連用形に偏って出現したもの

	文章タイプ	テ形 度数(比率)	連用形 度数(比率)	合計度数
ある	新聞	4(0.07)	55(0.93)	59
	論述	30(0.31)	68(0.69)	98
	小説	32(0.34)	61(0.66)	93
おる①	新聞	0(0.00)	124(1.00)	124
	論述	0(0.00)	53(1.00)	53
	小説	0(0.00)	26(1.00)	26
される	新聞	4(0.04)	87(0.96)	91
	論述	29(0.23)	99(0.77)	128
	小説	16(0.38)	27(0.62)	43
させる	新聞	3(0.21)	11(0.79)	14
	論述	9(0.33)	18(0.67)	27
	小説	2(0.25)	6(0.75)	8
くりかえす	新聞	1(0.20)	4(0.80)	5
	論述	1(0.17)	5(0.83)	6
	小説	0(0.00)	4(1.00)	4
はじまる	新聞	0(0.00)	5(1.00)	5
	論述	0(0.00)	6(1.00)	6
	小説	1(0.33)	2(0.67)	3
ひろがる	新聞	0(0.00)	3(1.00)	3
	論述	0(0.00)	2(1.00)	2
	小説	0(0.00)	2(1.00)	2
つくる	新聞	1(0.14)	6(0.86)	7
	論述	4(0.44)	5(0.56)	9
	小説	4(0.44)	5(0.57)	9
ひらく	新聞	0(0.00)	9(1.00)	9
	論述	1(0.33)	2(0.67)	3
	小説	2(0.50)	2(0.50)	4

〔3〕「**ちがう**」はすべて「～とちがって」という形で、以下のように用いられている。

日常生活という舞台では、演劇の舞台とはちがって、両者の関係は未分化である。(『まなざしの人間関係』)

これに関して、渡辺（1971）では以下のように述べられている。

体格は父に肖て頑丈だ。
などの表現における傍線部「父に肖て」（中略）は、「体格が頑丈だ」（中略）という事実に対して、表現主体が下した解説内容を示すと共に、後続する解説対象を誘導する職能を託された、立派な誘導成分であると認めねばならない。

「演劇の舞台とはちがって」は、「日常生活という舞台では、両者の関係は未分化である」という事実に対して、表現主体が下した解説内容を示しているので、「父に肖て」と同様、誘導成分とみなされてよい。渡辺（1971）は、「活用体系」の表において、動詞の誘導形として「肖て」を挙げ、テ形のみを認めており、いわゆる連用形に誘導の職能を認めてはいない。しかし、以下のように、先の「～とちがって」と同様の機能を担う連用形も存在する。

この刑務所は一般の犯罪者を入れる刑務所と違い、交通事故によって刑を言い渡された人を専門に収容する刑務所である。(『たべものと日本人』)

誘導の機能を担うものがテ形に偏って出現することはあるが、「誘導の機能を担うのはテ形のみである」とするのは、過剰な一般化であるといえる。

〔4〕「**あらためる**」はすべてテ形で出現し、ヲ格やニ格を伴わずに、以下のような用法で用いられていた。

地球上の六分の一の地域に社会主義国家を実現させることとなるロシア革命の現代的意義については、あらためて述べる必要はなかろうが、(後略)。(『二十世紀の世界』)

この例文で「あらためて」は、後続述語の事柄を詳しく説明していて副詞的に用いられている。「あらためて」を取り去って、「ロシア革命の現代的意義については、述べる必要はなかろう」とすると、後続述語の表わす意味が変わってしまうことからも、明らかである。

「**だまる**」の場合、テ形で出現しているものはすべて、以下のように、後続述語の事柄を詳しく説明していて副詞的に用いられていた。

鳥飼刑事は、何か言いたそうだったが、そのまま黙って帽子をかむった。(『点と線』)

一方、連用形で出現しているものはすべて、以下のように、後続述語の事柄を詳しく説明

する副詞的成分として用いられているというよりも、「しゃべるのをやめる」という現象（動き）がその場で生起したことを表わしているものであった。

> 養鶏場の経営者は、（中略）「（会話文中略）」としきりに聞く（後略）。養鶏場の男（＝養鶏場の経営者）は黙り、それから無表情のまま大きなダンボールをかついできた。（『新橋烏森口青春篇』）
> 男がふと黙りこくった。「（会話文中略）」。またしばらく黙り、唇を震わせて言った。（『毎日新聞』）

このような「あらためて」「だまって」を、副詞とみなすか否かは各研究者によって分かれている。例えば、仁田（1995）では、「シテ形接続（本稿におけるテ形）」の説明で、「より副詞化したもの」としてこの「あらためて」と「だまって」を取り上げている。成田（1983）では、「動詞の『て』形の副詞的用法」として「だまって」を取り上げている。一方、鈴木（1972）、新川（1974）、奥田（1989）では、動詞と副詞が連続することは認めつつも、「だまって」を副詞の例として挙げている。

また、「あらためて」「だまって」は、活用形がテ形に固定化されていないこと、終止用法の場合と意味的にあまりかけ離れていないこと、「日（/回/場）をあらためて」などのように格を取る場合があることなどが、国立国語研究所（1964）の同語異語判別で副詞として認定されなかった要因とも考えられる。

今後、副詞的用法のときの意味が終止用法のときの意味とどのように異なっているかの、より客観的な調査方法の確立が必要である。また、今後、活用形の固定化の度合いや、格を取るか否か、また取る場合は、副詞的用法の中で格を取らない場合に対する取る場合の割合がどれぐらいであるかなど、詳細な調査をしていく予定である。

6.2 全文章タイプで連用形に偏って出現したもの【表3】

〔1〕**「ある」「おる①（居）」**はともに存在詞であるが、「おる」のテ形（おって）は標準語においてはほとんど使われず、「いる（居）」のテ形と補充的関係にあり、連用形に偏って出現するのは当然なので、「ある」と同一に論じるべきではない。

では、何故「ある」は連用形に偏って出現するのか。「ある」が後続節に対して独立的であることも理由の一つと考えられる。後続節に対して従属的か独立的かの尺度として、前後の主体の異同の多さが指摘されている（仁田（1995）等）。調査の結果、「異主体」対「同一主体」の割合は、連用形は169対15（テ形は56対10）となり、圧倒的に異主体のものが多かった。この点に関して、松田（1985）では、「状態性用言の連用形の場合、前後件の主語の異同はほぼその割合が等し」いと述べられている。松田（1985）は「動作性のもの」（動作性の動詞）「状態性のもの」（状態性の動詞、形容詞、名詞述語）という区分のもとに両形を調査して数値を出しており、「状態性のもの」の中に、テ形は「～していて」「いて」「あって」「～であって」などの例が挙がっている。

しかし、本調査の結果、「ある」の連用形は、圧倒的に異主体の場合が多いというように、松田（1985）とは異なる結果となった。このことは、テ形・連用形の使用差を明らかにする

ためには、状態性用言として一括りにした分析では不十分であり、動詞ごとに分けて分析する本研究の方法の妥当性を示している。

〔2〕「される」「させる」は、それぞれ受身と使役を表わし、これには単独の「する」の活用形と漢語サ変の「する」の活用形の両方が含まれているが、その他の動詞の受身形・使役形は、本調査が従った調査方法では、単位切りの基準で助動詞として切り出されてしまい、直接、調査対象には含まれない。本調査とは別に、同一の資料を用いて調査した結果、使役形は、新聞・小説ともに「連用形」が多かったものの、論述文では「テ形」が多く出現した。よって、使役を表わすものは連用形に偏るという一般化はできない。

一方、その他の動詞の受身形についても調査した結果、全文章タイプともに、連用形に偏って出現した。では、何故、受身を表すものが連用形に偏って出現したのかを調べるために、先の「ある」の場合と同様、前後の主体の異同を調べてみた。その結果、「異主体」対「同一主体」の割合は、連用形は111対102（テ形は10対38）となり、先の「ある」ほど異主体のものは多くはなかった。

そこで、単に、主体の異同だけではなく、主体が意志主体か、無意志主体か、についても調べてみたところ、「無意志主体」対「意志主体」の割合は、連用形は148対63（テ形は25対23）となり、無意志主体のものが非常に多かった。また、意志主体の場合でも、受身ということ自体、テ形・連用形が表す事態は、意志主体にとってコントロールできない事態である。先の「ある」が連用形に偏ることも考えあわせると、無意志的事態に連用形が選択されやすいということも考えられる。「はじまる」「ひろがる」も、すべて無意志的事態であったので、今後その他の動詞についても調べてみる必要がある。

〔3〕「くりかえす」は、15例中、格を取らず後続述語を詳しく説明していて副詞的用法として用いられているものが8例あった。格を持つ動詞の中止用法のものは7例であり、そのうち、連用形が5例、テ形が2例で、連用形の方が多かったが、連用形由来の副詞は中止用法の時も連用形が多く出現するのか否か、これだけでは用例が少ないので、さらに資料を拡大して調査する予定である。

また、テ形由来の副詞についての経路や原理は、先行研究においてしばしば指摘されているが、連用形由来の副詞は、その現象は指摘されているものの、経路や原理についての指摘はなされていない。テ形由来の副詞と連用形由来の副詞とでは、副詞形成の原理やプロセスが異なる可能性があるので、今後、それらの差異についても研究していきたいと考えている。

7．まとめと今後の課題

1）動詞テ形と動詞連用形の使用差を明らかにするために新聞・論述文・小説の3つの文章タイプを資料として調査を行なった結果、文章タイプの差異がテ形・連用形の選択に関与するものもある一方で、文章タイプの差異に関わらずテ形或いは連用形に偏って出現するものが見られた。

2）「全文章タイプでテ形に偏って出現したもの」には、連用形の時に一拍になるもの、機能

語的表現、後続節に対する解説内容を示しているものなどの他に、副詞的用法のもの（「あらためて」「だまって」）があった。

3）「全文章タイプで連用形に偏って出現したもの」には、「ある」「される」などの他に、副詞的用法のもの（「くりかえし」）があった。先行研究ではテ形由来の副詞の原理が主に取り上げられているが、今後はテ形由来の副詞と連用形由来の副詞との違いについても研究していく必要があることを示した。

謝辞

本稿は、日本言語学会第128回大会における発表をもとに改稿したものであり、発表の際には多くの方々からご意見を賜りました。ここに記して御礼申し上げます。

文献

奥田靖雄（1989）「なかどめ—動詞の第二なかどめのばあい—」『ことばの科学２』むぎ書房

言語学研究会・構文論グループ（1989）「なかどめ—動詞の第一なかどめのばあい—」『ことばの科学３』むぎ書房

国立国語研究所（1962）『国立国語研究所報告21現代雑誌九十種の用語用字』第一分冊

国立国語研究所（1964）『国立国語研究所報告25現代雑誌九十種の用語用字』第三分冊

鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』むぎ書房

成田徹男（1983）「動詞の「て」形の副詞的用法—「様態動詞」を中心に—」『副用語の研究』渡辺実編　明治書院

新川忠（1974）「副詞」『教育国語』38むぎ書房

新川忠（1989）「なかどめ—動詞の第一なかどめと第二なかどめとのばあい—」『教育国語』99

仁田義雄（1995）「シテ形接続をめぐって」『複文の研究』上　くろしお出版

林雅子（2002）「動詞のテ形と連用中止形の使い分けに関する実態調査—中級以上の作文・小論文指導のために—」日本語教育学会秋季大会予稿集

林雅子（2004）「動詞テ形と連用形の使用差に関する計量的調査研究—新聞・小説における「なる」の用法を中心に—」『計量国語学』24巻７号

松田（野村）剛史（1985）「「て」、連用形、「と」の分布」『大谷女子大国文』15

宮島達夫（1982）「１拍語形の不安定性—「シ」と「シテ」」『計量国語学』13巻７号

渡辺実（1971）『国語構文論』塙書房